

令和7年
11月
発行

南達交通安全新聞

南達交通
対策連絡
協議会

年末年始の交通事故防止 県民総ぐるみ運動始まる

運動
期間

令和7年12月10日(水)から
令和8年1月7日(水)までの29日間



【運動スローガン】 てをあげて くるまにおしらせ ぼくはここ

運動の
重点

- (1) 道路横断中の交通事故防止
- (2) 夕暮れ時や夜間の交通事故防止
- (3) 飲酒運転の根絶
- (4) 高齢者が関与する交通事故防止
- (5) 自転車利用時のヘルメット着用と交通ルールの遵守

南達の
合同
出動式

日 時 令和7年12月10日(水) 午後4時30分～
会 場 サンライズもとみや(本宮市本宮字矢来)
内 容 一日警察署長に平愛梨さん(俳優)を任命し、事件事故防止PRイベントや本宮駅前周辺での街頭広報、地元FMラジオに出演いただく予定です。みなさま、ぜひ会場へお越しください。

第36回南達交通安全大会開催される

南達交通対策連絡協議会主催の南達交通安全大会は、令和7年11月15日(土)に本宮市サンライズもとみやで開催されました。

この大会は、南達一市一村の関係機関、団体などが一丸となって、総合的な交通事故防止対策を推進することを目的に開催され、交通安全功労者や地域別交通事故防止コンクール、交通安全作文コンクールの受賞者に、賞状が贈られたほか、交通安全作文コンクールの最優秀賞作文が発表されました。

大会の最後には、大会宣言が決議され、参加された皆さんは、交通事故防止に対する決意を新たにしました。



大会長挨拶を述べる 高松 義行 本宮市長

大会宣言

交通事故をなくすことは、南達一市一村住民すべての願いです。

本日、第36回南達交通安全大会にあたり、命の尊さを深く認識するとともに、交通事故のない、安全で安心な南達地域を実現するため、決意を新たに、南達地域住民一丸となって次のことを実行し、交通事故の根絶に向けてまい進することを誓います。

- 1 わたしたちは、関係機関・団体と連携、協力し、「自らの安全は自ら守る、地域の安全は地域が守る」という安全意識をもって、交通事故防止運動を推進してまいります。
- 2 わたしたちは、「交通安全は家庭から」を合言葉の下、思いやりとゆずり合いの心をもって、子どもと高齢者の交通事故防止に努めます。
- 3 わたしたちは、交通事故発生時の被害の防止・軽減を図るため、全ての座席で必ずシートベルトとチャイルドシートを着用します。
- 4 わたしたちは、夕暮れ時や夜間の交通事故防止に効果が高い夜光反射材の着用促進に取り組んでまいります。
- 5 わたしたちは、地域一体となって飲酒運転根絶運動に取り組み、社会から飲酒運転を追放します。
- 6 わたしたちは、自動車などを運転する際、横断歩道を渡ろうとする歩行者がいる時は、必ず一時停止しなければならないという交通ルールを守ります。

発行 / 南達交通対策連絡協議会

本宮市交通対策協議会 / 大玉村交通対策協議会 / 郡山北警察署本宮分庁舎
本宮地区交通安全協会 / 本宮地区安全運転管理者協会 / 安全運転管理本宮事業主会
本宮市交通安全母の会連合会 / 大玉村交通安全母の会 / 南達交通教育専門員連絡協議会
本宮市高齢者交通安全指導隊 / 大玉村高齢者交通安全指導隊

◎表彰状伝達

△敬称略△

東北管区警察局長・
東北交通安全協会長連名表彰

【優良運転者】

橋本 敏雄（本宮市）

交通安全誉章（緑十字銅章）

【交通安全功労者】

遠藤かおり（大玉村）

【優良安全運転管理者】

大内 貴志（本宮市）

【優良運転者】

安齋 敏夫（本宮市）

斎藤 雅彦（本宮市）

遠藤 隆（本宮市）

福島県警察本部長・

福島県交通安全協会長連名表彰

【交通安全功労者】

川名 清政（本宮市）

佐藤 幸雄（本宮市）

伊藤 孝郎（本宮市）

渡辺 一夫（本宮市）

奥山 英雄（本宮市）

国分 照夫（本宮市）

【交通安全功労団体】

本宮市まゆみクラブ連合会（本宮市）

福島県交通対策協議会長表彰

【交通安全活動協力者】

米津 健治（本宮市）

三瓶 和二（本宮市）

三瓶 和彦（本宮市）

◎地域別交通事故防止コンクール

第1位

本宮地区交通安全協会糠沢分会（本宮市）

第2位

本宮地区交通安全協会 長屋 分会（本宮市）

第3位

本宮地区交通安全協会第3分会（本宮市）

第4位

本宮地区交通安全協会 白岩 分会（本宮市）

第5位

本宮地区交通安全協会第4分会（本宮市）

第6位

本宮地区交通安全協会第5分会（本宮市）

◎交通安全作文コンクール

応募総数294点

△敬称略△

【小学生低学年の部】

最優秀賞

糠沢小学校 3年

優秀賞

玉井小学校 2年

佳作

本宮小学校 3年

佳作

大山小学校 3年

【小学生高学年の部】

最優秀賞

糠沢小学校 5年

優秀賞

大山小学校 6年

佳作

大山小学校 4年

佳作

本宮まゆみ小学校 4年

【中学生の部】

最優秀賞

大玉中学校 3年

優秀賞

本宮第二中学校 3年

佳作

本宮第一中学校 2年

本宮第一中学校 3年

【一般の部】

最優秀賞 本宮市

優秀賞 本宮高等学校

佳作 本宮高等学校

1年 五十嵐彩希

◎感謝状伝達

前 安全運転管理本宮事業主会長

米津 健治（本宮市）

前 本宮地区安全運転管理者協会会長

三瓶 和二（本宮市）

前 本宮市交通安全教育専門員 三瓶 和彦（本宮市）

【小学生低学年の部】

本糠沢小学校3年

伊藤 翠さん

【小学生高学年の部】

糠沢小学校5年

遠藤 想太さん

交通安全作文コンクール最優秀賞作文を発表する受賞者の皆さん



【中学生の部】

大玉中学校 3年

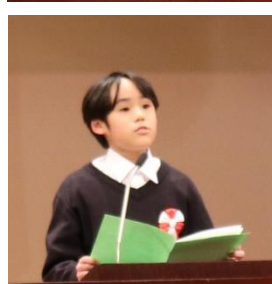
矢崎 祥史さん



【一般の部】

本宮市

吉田 望さん



★交通安全作文コンクール最優秀賞作品【小学生低学年の部】

『やさしさでできている、交通安全』

本宮市立糠沢小学校 3年 伊藤 翠

わたしは毎朝、小学校まで登校はんのみんなで歩いて通っています。朝は、仕事に向かう車やトラックがたくさん通る道を歩きます。行く中には、しん号のない交差点があり、とてもきけんです。でも、わたしにはとても心強い人がいます。それは、登校はんのはん長さんです。はん長さんは、みんなより早く家を出て、わたしたちが安全に学校に行けるように交差点をわたらせてくれます。車が来ていないか、あぶなくないか、しっかりと見えてくれて、「今わたっていいよ。」と合図してゆうどうしてくれます。また、地いきの人も朝、おうだん歩道に立ってわたしたちをゆうどうしてくれます。車がきていないかをかくにんして、はんのみんなが全員わたりおわるまで立ってくれています。いつも、わたしたちを安全に学校までつれていってくれるはん長さんや地いきの人がいてくれてありがたいと思いました。

わたしたちのはんは、交差点をわたり切った後かならずしていることがあります。それは、止まってくれた車にみんなでおじぎをすることです。いそがしい時間たいなのに、わたしたちのことを考えて止まってくれるからです。ある日、いつものようにみんなが交差点をわたり切った後、おじぎをすると、運んでいるいたおじさんがこつとわらってくれました。そのえ顔を見て、わたしの心もぼかばかして、朝からいい気分になりました。交通安全で大切なのは、ルールをまもることだけじゃない、人と人とのやさしさというつながりであり、たっていることに気づきました。はん長さんや地いきの人のような、登校している人を思いやる気持ち、止まってくれる車の人のやさしい気持ち、それにかなしやる気持ち。どれもやさしさであふれています。もし、はん長さんが合図をしてくれなかったら、わたしは不安な気持ちでわたらなくちゃいけません。うんてん手さんが止まってくれなかったら、きけんな目にあっているかもしれない。毎日の当たり前は、本当は当たり前じゃなくて多くの人がびとにささえられていると気づきました。

これからも、わたしは、交通ルールをまもり、感しやの気持ちをわすれずに朝の道を歩いていきたいです。そして、大きくなったら、はん長さんのように、みんなの安全をまもれる人になりたいです。

交通安全は、毎日のくらしとつながっています。「青信号だから大じようぶ。」と思って、ゆだんしてはいけません。よくまわりを見てわたること、二れつになつて道を歩かないこと、車や自てん車の人の気持ちも考えること。それが一つしかない自分の命をまもるためにひつようなこと。「交通安全はみんなのやさしさでなり立っている」ということをわすれずに、友だちや地いきの人たちと一しよに、じこのない町を作っていきたいです。

★交通安全作文コンクール最優秀賞作品【小学生高学年の部】

『もしかしたら』を考える

本宮市立糠沢小学校 5年 遠藤 想太

信号が青に変わったらすぐに渡りたくなります。特に急いでいる時はそうだと思います。でも、ぼくは青に変わっても「もしかしたら走ってくる車がいるかもしれないぞ」と一呼吸置いて左右を確認してから道を渡るように心がけています。ぼくがこんなに気を付けるようになったのは、前にこわい経験したからです。

三年生のときの出来事です。ぼくは、庭で自転車に乗っていました。たんじよう日に買ってもらったお気に入りの自転車です。もちろん、ヘルメットもちゃんとかぶりしました。春の風が顔にあたって気持ちがいい。ペダルをぐんぐんこぎました。「危ない！」突然お母さんのさけぶ声がしてぼくは慌ててブレーキをかけました。ドン！ぼくの自転車に弟がぶつかりました。心ぞうがバクバクしました。弟はきよんとんととして、泣きだしました。しりもちをついたけど幸いけがはありませんでした。本当に良かったです。弟は庭に遊びに来ていた猫を見つけてぼくの方に飛び出したのです。まだ小さい弟にはお母さんがついていたし、自分でも気を付けて運転していたのに。いつの間にか「大丈夫だろう」と油断していたのかもしれない。

ぼくたちは話し合いました。もし、ぼくがブレーキをかけるのがおそかったら。もし、弟がぶつかったのが車だったら。もし、ぼくに突っ込んできたのが車だったら。考えると背筋が冷たくなりました。ぼくと弟はよくけんかをします。お母さんには「ふたりともいいかげんにしなさい」と怒られます。だけど、弟が事故でいなくなってしまうたら泣くと思います。ぼくがいなくなったら、きつと弟も泣くでしょう。ひとりではけんかもできません。それにお母さんやお父さんを悲しませるのは絶対にいやです。今、弟は前より大きくなって、まだまだ危なっかしいけど少しずつ交通ルールも覚えてきています。車に乗るときは自分から「いにいに、ぼくのシートベルトしめて」と頼んでくるようになったし、道路を渡るときはぼくのまねをして小さい手をあげて渡るようになりました。でも、まだ「もしかしたら」を考えるのは難しいかもしれません。だから、みんなが気を付けるし、ぼくが弟のお手本になれるように交通ルールを守りたいと思います。

気を付けていても事故にあうこともあります。だけど、運転する人も歩く人もおたがいに気を配って、一人一人が「もしかしたら」を考えて意識していけば、事故で悲しい思いをする人をへらせると思います。ぼくの命、家族の命、友だちの命、誰かの命。一つしかない、みんな大切な命です。

★交通安全作文コンクール最優秀賞作品【中学生の部】

『危険や事故にあわないために』

大玉中学校 3年 矢崎 祥史

僕は、趣味でロードバイクに乗っています。予定がなく、天気の良い日には、ロードバイクに乗って、ヒルクライムやスプリントのトレーニングをしています。自分の脚次第で、快適に、どこまでも走ることができる自転車は、とても楽しく、便利な乗り物だと思います。また、サイクリングは、その地域の自然や、気候の特色を味わうことができる、比類のない趣味であると思います。

しかし自転車は、公道を走り、誰でも乗ることができるとは、乗り物であるため、楽しく便利なだけでなく、危険な面もあります。実際、自転車による事故によって、命を落としてしまう人が多くいるのも現状です。僕も、交通ルールを守っていても、身の危険を感じた場面が何度ありました。交通事故や、危険な場面を少なくするためには、自転車のルールと、自動車のルールを、お互いのドライバーが、しっかりと理解し、思いやりと余裕のある運転をすることが大切だと思います。

軽車両である自転車と、自動車のルールは、共通する部分が多いですが、異なる部分もあります。僕は、その部分の理解の一致が、未だに足りていないのが現状だと思います。

まず、軽車両の自転車は、車道を走る乗り物です。自転車に乗ることが趣味のサイクリストにとっては、それは周知のルールとなっていますが、日本では、自転車が歩道走るイメージが、多くの人に染み付いています。そのため、自転車が車道を走っていると、迷惑だと思っている自動車も少なくないはずです。このような考えを払拭するために「自転車は車道を走るもの」というイメージを、多くの人が知る必要があります。

また、サイクリストは、停止や減速、右折や左折の時に「手信号」を使います。自動車のドライバーに、安全のために自分の動きを伝える手信号も、意味が伝わっているかは、はっきりしないところがあります。

自転車に乗る人も、自動車との間で、事故を起こさないために、注意する必要があります。高速で走ることができるロードバイクでも、自動車と同じ速度で走るのは難しいことがほとんどです。そのため自転車は、自動車に追い抜かれるのが普通ですが、そのときに自転車側は注意が必要です。自動車と張り合って走ってしまうと、自動車側は、進路をふさがれて、不快感を覚えてしまいます。後ろから自動車が来ているときは、自転車側は、路肩に寄って減速し、道をゆずるなどの配慮をするのが大切です。

同じ車道を走る、特徴が異なる自転車と自動車、お互いのドライバーが、安全な運転をするためには、お互いの乗り物への理解と配慮が必要です。危険な場面や事故にあわないために、僕はこれからも、危険を予測し、自動車のドライバーの気持ちを考えて、楽しくロードバイクに乗っていきたいです。

★交通安全作文コンクール最優秀賞作品【一般の部】

『大人が変われば、子供も変わる』

本宮市 吉田 望

私は現在、四歳になる子供を育てながら働いている。毎朝、子供を保育所に送り届けてから職場へ向う生活を送っている。

いつも通り保育所に着き車を駐車しドアを開けた瞬間だった。斜め後ろからスツと一台の車が私の車のすぐ脇をすり抜けて行った。私はヒヤッとした。もし子供が先にドアを開けて飛び出していたら、もし少しでも立ち位置が違っていたら、事故が起きていたかもしれない。幸い何も起きなかったが、悲しいことに全国では保育所での交通事故が起きている。

保育所の駐車場は時間帯によっては多くの保護者が出入りする。子供を急いで送って職場へ向いたいと思う気持ちは、誰しも同じだと思う。だからこそ、落ち着いて行動しなければならぬ場所でもある。少しの焦りが大切な命を奪うこともないかねない。

この出来事をきっかけに、私は自分の運転に対する意識や交通ルールに対して改めるようになった。「少しくらいなら」、「急いでいるから」といった気の緩みや焦りは時に取り返しのない結果を生む。子供ができる前は想像もつかなかった危険に今は日々気づかされている。

職場や地域でも、大人一人ひとりの行動が社会全体の交通安全意識を左右する。特に子供達は、身近の大人のふるまいから「ルールとは何か」を学んでいく。だからこそ、私たち大人は模範となる行動をとり子供達に示す必要がある。

「大人が変われば、子供も変わる」この言葉は、私たち大人が模範となる行動をとることで、わが子もそれを自然と学んでいく。それが未来の交通安全を支える土台となる。全ての大人がその意識を持てば、子供達も交通安全について考え交通事故のない社会に一步近づくことができると信じている。